

でしまいました。落ちこむ気持ちはよくわかるけど、でもそれはちがうと思います。サッカーは十一人全員で力を合わせてやるスポーツだから、健一にはあきらめないでほしい。かんとくは、健一にはフワードよりもバックのほうがかかっていると聞いたから、ポジションをかえたいと思います。

ぼくは、町内のスポーツ少年団のほかに、榛原FCに入るためにトレーニングセンターに通っています。前期の練習に合格して、九月から後期の練習が始まります。たくさん練習して、榛原FCの一員になりたいです。

健一は、一度はサッカーをやめようと思ったけれど、いろんな人に助けられ立ち直ることができてすごくよかったです。健一には、もっと上を目指してもらいたいと思っています。ぼくも、健一に負けないくらい練習して、つらい時や苦しい時も夢にむかってがんばりたいです。

ぼくもミミズ博士になりたい

北小五年 中村慎



「お母さん、お母さん、アースワームって知ってる。」

「え、何のこと。」

「あのね、ミミズのことを英語でアースワームって言うんだよ。地球の虫っていう意味なんだって。」

ぼくは得意になって母に話した。そして、ミミズの種類はとてたくさんある事、分りするミミズがいる事、化学肥料を使わないでミミズで野菜作りをしている人がいる事など、この本で初めて知ったミミズの不思議について全部話して聞かせた。母も知らないことばかりらしく、「お母さんも勉強してみたいから、その本読ませてね。」と言った。母の顔がうれしそうに見えた。

ぼくは小学校三年生の時、雨上がりの道路にミミズが何匹も出ていてひからびていたのを見て、ミミズについて調べてみようと思った。夏休みを利用して、ミミズの生息場所や好きな土、好きな食べ物などを調査してみた。ほかく箱を作ってほかくしようとしてみたが、失敗に終わってしまった。だから、今年はおつとミミズの生態をくわしく知りたいと思って「二十四時間ミミズ観察日記」をつけることにした。ぼくは今、ミミズの研究が楽しくてしかたがない。自分が予想した事とちがう結果が出る事も多いけれど、新しいおどろきがある。今年はお真夜中にミミズ二匹が体而起き上がらせて、観察ケースの中でダンスをおどるような行動を見る事ができた。まるでアクロバットのようにワクした。

つこつと研究を進めているところだ。ミミズを農業に役立てるといつても、すぐに結果が出てみとめてもらえるものではないはずだ。とても地道にミミズの動きについて調べている事がすごいと思った。まだまだぼくの研究は中村博士に追いつけそうもない。でも、ぼくももっとミミズと仲良くなって、いつかは「ミミズ博士」とよばれるようになりたい。

環境にやさしい農業が求められる時代になった今こそ、ミミズパワーが必要だと思ふ。ミミズの栄養たっぷりのフンがたい肥になり、ミミズがトンネルを作れば土がやわらかくなる。そして空気や水をためる。畑の土にとってミミズはかせない存在だと思ふ。ぼくの家の畑でもおばあちゃんがたくさんの野菜を作ってくれている。中村博士のミミズ農法で作物を作るのはかなり大変な事かもしれない。しかし、作物が喜んで大きくおいしくなるのなら、ぼくもおばあちゃんを手伝って畑の土作りをして、もっとたくさんの作物を作ってみたいと思ふ。

きつとぼくと同じようにミミズの新しい発見がうれしくて研究を続けているのだと思つた。ぼくとちがう事といたつた。中村さんはミミズ研究を自分の一生の仕事だと心に決めて、農業に役立てるためこ